

エキスパートになる : 翻訳学習者の翻訳能力向上に関する予備的調査

| | |
|--------|---|
| 著者名(日) | 小坂 貴志, 朴 シウオン |
| 雑誌名 | 言語教育研究 |
| 巻 | 25 |
| ページ | 129-151 |
| 発行年 | 2014-11 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1092/00001189/ |

エキスパートになる

—翻訳学習者の翻訳能力向上に関する予備的調査—

小坂貴志
朴シウオン

要旨

翻訳通訳の分野では、その処理の特殊性から、同時通訳の脳内処理過程が盛んに研究されてきた一方、翻訳では翻訳結果そのものを分析対象とする傾向が強く、翻訳行為の過程研究については一部の研究者の間でおこなわれるに留まってきた。翻訳研究が多様化するにつれ、翻訳研究における過程研究も盛んになり、本研究では、翻訳行為の過程を通して、翻訳を学ぶ神田外語大生が翻訳能力をいかに向上させているかを調査研究する。翻訳を学ぶとは、新たな翻訳能力を学び、既存の能力との統合をはかっていくことで、翻訳テキストで書かれた分野の関連知識を調査を通じて学び、演習を通して体得した翻訳技術を実テキストに応用するための認知的方略を知ることである。学生が従事する翻訳行為の過程を理解する方法として、現在では様々なツールが考えられるが、本研究では、翻訳方略の習得、統合過程をTAPs(Think-aloud Protocols)手法にて調査する。データは、通訳翻訳に関する広範囲なトレーニングを受けた学生2名、翻訳通訳トレーニングを受けたことのない上級英語話者である学生3名、上級英語話者一名から収集したが、本論文では予備調査の結果として、通訳翻訳に関する広範囲なトレーニングを受けた学生1名(以下、課程生)、翻訳通訳トレーニングを受けたことのない上級英語話

者である学生1名（以下、普通生）の翻訳方略に関する比較調査の結果を考察する。

はじめに

翻訳と通訳は、異文化をつなげる橋渡しをする役割から、一つの分野を形成しているかのように扱われはするが、それぞれの作業形態、作業者、作業内容の違いから、特に研究面では別個にとりあげられることが多い。同時通訳の可能性や負荷について、認知科学的な研究がおこなわれてきている一方、翻訳とは、結果に対する考察が主で、過程には関心があまりあたらなると指摘される（Bernardini, 2001）。具体的には、翻訳の認知過程よりも、特定刺激に対する反応を調査したり、誤訳を分析したり、また、かなりの比重が置かれるのが訳そのものの分析であることが知られている（Eftekhary & Aminizadeh, 2012）。その要因として、発話言語を主な対象とする通訳に対して、書面言語が主な対象である翻訳という違いもあろうが、通訳者の行為は、通常はマイクを通してだが、聴衆者としてその作業過程そのものが耳を通して伝わってくるのに対し、翻訳は過程そのものはどうであれ、最終成果物としての翻訳の質に関心が集中するのは、翻訳行為そのものが通訳に比べて静的なものであることに部分的によっている。

翻訳研究がその歴史を重ねるようになり、翻訳行為の対象とするものが多様化するにつれ、翻訳行為の過程に関する関心も高まり、過程分析としての翻訳研究もおこなわれるようになってきている（Göferich & Jäskeläinen, 2009）。研究をおこなう上で議論が集中しているのが、翻訳行為の成果物である翻訳ではなく、翻訳者の翻訳中の行為に関する過程をどのような方法で把握し、検証するかであり、一つの手法としてTAPs（Think-aloud Protocols、以下TAPs）手法がとりあげられる。本研究では、翻訳学習者がどのように翻訳能力を向上させているか、また翻訳者との比較において翻訳学習者との翻訳能力の違いを明らかにするためTAPsにて検証をお

こなう。

認知過程を調査する

TAPsとは何か

Ericsson, K. A. & Simon, H. A. (1984)は、心理学の分野において、脳内情報処理過程を明らかにする目的でTAPsを開発した。その根本的な発想の元となるのは、思考過程は人間が発話可能なものである、という発話データの特徴で次のように説明している。「思考過程は、留意された情報または思考の一連の状態であるとみなすことができる。したがって、情報または思考は比較的安定しているため、発話することができる」(筆者訳)。思考過程とは「比較的安定しているため発話可能である」ことから、思考の軌跡を裏付ける目的で、実験者の思考過程を実発話の形で外化させるために使用されるTAPsの妥当性が論じられている。その後、主に情報技術産業における製品設計および開発といった実務面をはじめ、心理学、言語習得、翻訳研究、意思決定などの研究面でもTAPsは使用が普及されるまでに至った。本研究の実験説明に移る前に、TAPsに関係する先行研究をとりあげるが、各分野における先行研究のまとめは誌面スペースに限りがあるので、以降、翻訳研究におけるTAPs調査のまとめを中心におこなっていく。

翻訳研究におけるTAPs調査

Bernardini(2001)は、翻訳研究におけるTAPsを利用した研究の傾向と移り変わりを考察しており、ここでは調査の目的および実験参加者の特性について説明する。まず、TAPs手法を利用した調査の目的であるが、当初、翻訳行為に関して、どのような手続きを踏むかという翻訳の方略を検出することがその目的として多くとりあげられていたが、今後は、翻訳単位、自動処理、感情的側面についての翻訳過程研究に移行することが述べられている。翻訳単位とは、起点言語から目標言語へ翻訳がおこなわれる際、

必要に応じて文章で分割されたり、統合されたりなど、翻訳が扱う情報単位が変わることがある。自動処理はある行為を無意識的におこなう際、人はあえて内的な発話を伴わないことがあり、次に述べる実験参加者の特性とも関連している。翻訳行為とは書面言語を介するもので、多くの関心が言葉そのものに集まる傾向にあるが、実験参加者は当然の如く人間としての感情も持ち合わせているので、今後は翻訳行為の感情的側面についての分析考察がなされることもあげられている。

次に、TAPs調査に参加する実験参加者の特性に変化が見られることが指摘されている。当初、言語、翻訳学習者に実験参加者として参加してもらってきたが、特に今後の傾向として翻訳のプロにも実験に参加してもらようになっていく。これまでの参加者特性は、参加者を集める際の便宜性にもよるだろうが、実験の目的の多様化、つまり、これまでは翻訳学習者の、今後は翻訳のプロの翻訳過程における解明について研究をおこなうという実験の目的そのものが深まってきているためであるともいえる。翻訳のプロに実験に参加してもらおう際の考慮点がない訳ではなく、翻訳のプロは翻訳行為を考えながらおこなうよりは、処理そのものが自動化されていることが多いので、思考過程を知るに足る有用な発話に結びつくかの問題が発生しがちであり、発話されないがゆえに、実際の思考過程を捕捉しきれない恐れがあるため、その事実を知りえない可能性があることを指摘している。

次に、具体的なTAPs調査の例を紹介していく。Lauffer, S. (2002)は、翻訳調査支援ツールを利用してTAPsを3名の翻訳者に対して実施した。実験参加者の翻訳作業の様子はビデオ録画により記録をおこない、録画する対象範囲として、実験参加者の非言語側面を含んでいる。TAPs実験の後、実験参加者にインタビューをおこない、回顧的にも発話データを取得している。その結果、翻訳行為に関する3つの方略を見出し、それぞれ「理解すること、理由付けすること」、「検索すること」、「改訂すること」とある。翻訳過程

から、それぞれが必ずしも新鮮な響きのする行為ではないが、TAPsを通して得られた発話データを元にした研究結果であることを考えれば、一般的な翻訳方略として考えられるものとはほぼ一致したことは意義深い。TAPsを実施する際には、自然な作業環境を提供することが必要だと述べられているのは、翻訳調査支援ツールというTAPs調査に特化したツールによってもたらされた結果とも考えられる。つまり、翻訳行為は多くの場合、コンピューターを用いておこなわれ、調査の際にもコンピューターを利用することが推奨され、可能であれば、コンピューター操作そのものの記録も入手できるようにしておく。

Eftekhary, A. A. & Aminizadeh, S. (2012)は、文学作品をTAPs研究に利用した。翻訳方略の検出を目的に、12名の大学生を実験参加者として実験をおこなった。TAPs調査の結果、14の方略の一覧が作成されたが、その中でも「調べる」、「想像する」、「言い換える」の方略がもっとも頻繁に使用されることが報告されている。この研究は文学作品が使用されたことに特色があり、通常、翻訳過程、しかもTAPsといった作業に従事しながら、その行為を発話するという共起的な手法を活用しての研究の場合、実験参加者が親しみやすいジャンルからのテキストが使われる。文学作品と言えば、その性質上、当該調査に用いるジャンルとしては適切ではないことが想像されるが、文学作品もTAPs調査の対象ジャンルとして適切なものになり、かつそのための利用法もありえることを示唆している。

石原（2008）は、英語教育との関連で、日本人の実験参加者によるTAPs調査をおこなっており、上記のEftekhary, A. A. & Aminizadeh, S. (2012)と同様、文学作品を利用しての研究がおこなわれた。思考過程への反作用が少ないであろうとの理由から回顧法が用いられ、分析の主な対象となるのは、研究者による実験参加者への質問である。翻訳をしながらのTAPsではないため、実験参加者の手元をビデオ撮影し、実験参加者が回顧できない内容についてはビデオ画像を頼りに記憶を振り返ることができるようにしてい

る。文学作品という特異なジャンルのテキストを利用するにあたって、短めの作品を選んでおり、全作品を訳することができるほどの長さの文学作品である。相当な分量がある小説作品の中の数ページという訳ではないので、作品全体の理解を踏まえて、個々の文章について翻訳ができる工夫が凝らされている。調査の結果、8つの大カテゴリーが検出され、それらは、文学の読み、理解、翻訳、メタ報告、翻訳の葛藤、理解と訳の相互作用、探す、その他、である。また、大カテゴリーはさらに細かなカテゴリー化がおこなわれており、それとともに方略の発生頻度の記録もされている。

Sugita (2002) は、英語学習者が経験するであろう翻訳上の困難さを検出するため、日本人英語学習者がどのような過程で英語から日本語への翻訳をおこなうかをTAPsを利用して実験調査をおこなった。実験の結果、学習者によって直面する困難さには違いがみられ、起点言語の解釈を困難に感じる学生もいれば、起点言語ではなくむしろ目標言語である日本語において翻訳表現を捻出する際に困難を感じる学生もいた。英語教育の側面では、借用語の使用について英語教育に与える効用があるのではないかとの示唆をおこなっている。

以上、翻訳TAPs調査数例の結果を見てきたが、その有用性ばかりではなく、TAPsの研究手法としての制約についても指摘がなされている。先行研究の冒頭にあげたEricsson, K. A. & Simon, H. A. (1984)によれば、発話データに関しての批判として、高位認知反応に対する信頼性、タスクを実施していることへの発話の影響、認知スキルの自動化、主観的な解釈などがあげられる。これらの批判に対して、発話データの質を高めるには、実行行為の反応とその反応を認知しての発話の時間的距離を最小限にする、短期記憶からの情報にうまくアクセスできるよう事前に指示を与える、共起TAPsの場合には特に実験対象者を訓練し、TAPs手法に従うようにするなどの対策が考えられる。

翻訳研究におけるTAPs利用についても制約事項があげられている。

Bernardini (2001) は、ルーチン（親しみ度）タスクの選定、翻訳学習者とプロとの比較、モノログかダイアログか、発話が邪魔しないかの4点をあげている。タスクの親しみやすさとは、TAPs調査で使用するテキストに対して、調査参加者がどの程度、内容的に親しみを感じるかで、実験の中核である翻訳作業の成果物の品質を含め、翻訳行為の過程そのものにも大きな影響を与える可能性がある。次に、これまでの実験では主に翻訳学習者として大学生による実験への参加であったが、これをプロの翻訳者との翻訳過程の違いについても考察の対象にすることが提言されており、実験参加者の多様性については翻訳のプロによる実験参加が今後は課題となる。モノログかダイアログかは、翻訳作業を一人がおこなうか、複数でおこなうかの違いについて考慮すべきであるということで、共起的なTAPsのほか、回顧法では実験参加者に対して研究者が質問をおこなうので、形式的にはダイアログの形をとることがあり、そこでは発話を通しての思考過程の検出に与える研究者の呼びかけの影響を否定することができない。また、最後に指摘されている通り、TAPsで実験参加者に求めている発話が、実験参加者による翻訳作業そのものへ影響を与えないかについての懸念も指摘されている。

ここで述べられた制約を解消するための方策はどのようなものになるかについて、次の具体的な注意事項が与えられている。

- ・ 実験中、参加者とのやりとりを避ける
- ・ ビデオ撮影はひかえる
- ・ コンピューター操作の詳細を記録する
- ・ 予め、処理の指標を一覧にし、特徴を洗い出しておく（同上）

実験中に参加者がうまく翻訳できないときなど、その様子を観察している研究者は実験を先に進めるため口をはさんでしまいたくあることがある。

TAPsは参与観察ではないため、あくまで参加者の考える行為に任せ、実験中は指示を与えないようにする。これを可能にするには、実験本番に先立って、参加者に対して訓練をおこない、何の作業をどのような形で進めるかを心がけてもらう。

ビデオ録画に関しては、それを使わないことが推奨されている。これは実験参加者にできるだけ自然な形での作業環境を提供するためである。しかし、先行研究でも報告されていたように、実際の観察においては、言語面のみならず、非言語面に関する観察や非言語面での情報も回顧的な解釈をする際に参考になる。具体的な翻訳の作業方法に関して、現実の翻訳作業はコンピューターを利用しながら作業をおこなうのが通例になっているため、可能であればコンピューターを利用して実験をおこなうことが理想である。その際、単にコンピューターのワープロ機能を利用するだけではなく、翻訳作業のユーザー行為を記録するなど、TAPs用に開発された翻訳支援ツールの利用ができれば便利であろう。最後の注意事項としてあげられているのは、実験手続き自体に関するものではなく、実験によって得られるデータ分析との関連事項である。実験をやみくもに実施しても非効率なので、先行研究の中から得られた知見をある程度枠組みとして用意しておき、たとえば、翻訳の方略が研究テーマだとすると、どのような方略が予想されるかに基づいて実験をおこなうようにすれば、実験で得られたデータ分析をより効果的におこなうことができる。本研究では、TAPs手法の効果を最大限に、制約を最小限にするため、取捨選択的に対応策を講じ、翻訳学習者と翻訳のプロの翻訳面における認知過程について実験、考察を進めていく。

実験調査

データ収集と手順

いずれの共著者もTAPs手法を実施するのは未経験で、本格的な実験でど

のような工夫を施すべきかを予め特定するため、学生3名に参加を依頼し、パイロット実験を実施した。先行研究で指摘されていた手法に対する工夫のすべてを網羅することができないため、以下の点について考慮した。

- ・ 実験前に手順の説明をする。
- ・ 実験が始まったら、参加者とのやりとりはしない。
- ・ 発話をICレコーダーにて録音する。
- ・ 書面ではなく、口頭によるTAPsをおこなう。

パイロット実験の結果明らかになったのは、使用するテキストの難易度による影響であった。口頭でのTAPsを実施するには難易度を低く設定した方が発話がうながされるだろうとの予想から、執筆時点で共著者が1年生用英語購読テキストとして使用している教科書のある章を題材として使用した。しかし、使用した英文の内容が比較的易しかったため、ほとんどの箇所では円滑な訳ができていた。つまり、訳以外の部分の発話量が制限されてしまったがために、実験時に得られた発話で、実験参加者が訳を捻出す際にどのような思考過程を踏んでいるかが把握することが極めて困難となった。上記のように発話が制限されるのは、口頭によるTAPsが原因ではないかと考え、本番においては口頭ではなく、書面によるTAPsを実施することにした。

上記のパイロット実験の結果を反映させた形で、本研究に参加してもらった実験参加者は、神田外語大学の通訳翻訳課程に在籍する学生1名および同大学で学ぶ学生1名である。TAPs手法により、有効なデータが得られることを確保するため、次の通りの実験手続きによって実験が実施された。

1. 指示説明
2. 背景情報説明

3. TAPs練習 (20～30分)
4. 翻訳TAPs (1～1時間30分)
5. 実験後インタビュー (10分)

翻訳TAPsの開始と同時に、参加者の発話内容を含め、参加者の手元付近をビデオ録画した。表情なども撮影することは可能であるが、本研究では参加者の感情的側面は対象としないこと、できるだけ自然な作業環境を提供することの2つを理由に撮影範囲を限定した。撮影したビデオの発話内容をビデオ起こし、これを分析の対象とした。

翻訳教育に長年携わっている共著者の1人が、課程生と普通生とによる、ビデオ起こしされた翻訳TAPsの結果を比較検討した。ビデオ起こしした発話は、翻訳の手順の中でも、当該の共著者の一人が実際の授業で導入している翻訳方略や先行研究で指摘された方略などに関して特定をした。選択された翻訳方略についてさらにその内容を分類するため、コード化をおこない、さらに今回の研究の目的である課程生と普通生の翻訳方略を理解するために有効である方略の分析をおこなった結果、翻訳作業の導入時の違い、テキストを読むこと、調べること、文法事項と方略、表記に関しての5つの要素に対して特徴的な差異が特定できた。以下、これら5事項について、具体的な翻訳TAPsデータを紹介しながら考察を進めていく。

実験結果と考察

翻訳TAPsの分析に基づき得られた6つの要因について考察をそれぞれ進めていく。

翻訳作業の導入時の違い

翻訳作業の流れという観点からすると、大きな相違が翻訳冒頭の作業に見られた。

課程生

「はいえーととりあえず長いから意味が分からないとんー全体の意味を考えないと綺麗な日本語に訳せないからとりあえず読もう」

普通生

「えっとタイトルを確認して タイトルは重要だ まず確認してでえーっと祝い renewalがやまた新しくした最新のえ祝いだからま おそらくタイトルがさいまたぶん日本語で訳すとリニューアル あ消しゴム になっちゃった」

課程生の場合、冒頭の発話以降、かなりの時間をかけ、英文全体を読む作業をおこない、発話にも引用されている通り、全体から個別の意味を考えていく姿勢が身に付いていることがわかる。

普通生の場合には、テキスト全体を読むという作業をせずに、いきなりタイトルの訳からはじめており、「タイトルは重要だ」の発話にその意図が表れているように、全体をタイトルから把握しようとしている。一方、タイトルに関して、課程生は次の発話をしている。

課程生

「タイトルは後回しにして本文を読んでからこのリニューアルに一番合う単語を選ぶこととしてまずは本文を訳し始める」

タイトルをどのような手順で訳すか、という極めて単純な作業に対して、課程生と普通生とでは対極的な方略がとられている。短い記事のタイトル、論文のアブストラクトなどは、翻訳作業の最後に回す、という翻訳方略の鉄則が課程生の中で消化され、実践されていることが理解できる。冒頭以降の翻訳作業の流れについては、翻訳テキストの具体的な翻訳作業がはじ

まってしまうば、テキストの初めから終わりという方向で翻訳作業がおこなわれるようになるので、基本的な相違はなくなる。

テキストを読むこと

第2の事項として特徴的にあげられるのは、テキストを読むことについてである。第1事項と深く関連するが、ここでも違いが表れたので説明する。課程生の場合、すでに比較した通り、翻訳作業の冒頭で英文テキストを読んでから作業を開始した。その際、単に英文を読んで内容を理解するだけではなく、どの単語の意味がわからないのか、どの情報を調べなければならないのかについて把握しつつテキストを読んでいる。

課程生

「In Iran the New Year is called Nouruzと分かんないから定訳を調べるthe celebration begins on the first day id spring and last for 13 days a few weeks before Nouruzこれも調べるpeople plant wheat or lentilこれも調べるin a small pot by the time Nouruz arrives the seeds have grown into young plants that symbolize new life of spring and the new year in the last day of Nouruz people gather for picnics they bring their potted plants ちょと確認するあとで（中略）December 31 People decorates their homes with tied pine branches あーあーこれは松のことだけど日本語のきれいな定訳がわからないから調べるadorned with fern and white ribbon for luck and long life このadornedとfernsがわからないから調べるけどin addition they hang straw ropes at the entrance of the home to keep our evil spirits as the the old year year passes the Ijaw of the Ni Nigeria このイジャウもわからないthe new year on January first on the eve of new year they try to scare away evil spirit of the old year by shaking trees banging pots and pans bangingもわかんないから調べる and wearing masks they may also clear away evil by dusting everything in their homes and throwing

clothes into the rivers They believe that toで切れるthis custom keeps bad luck from following them into the new year In Columbia it is considered good luck to wear yellow underwear during the new year celebration people also make and decorate ん ペイピアマシェこれも分からないから調べるballoons (中略) Rosh Hashanah これも分からないから調べる Rosh Hashanah (中略) sweet foods such as Kugel a noodle dish with raisins レイズン レーズンかなしいラベルこのクゲルも日本語の定訳を調べるand apples dipped in honey These foods symbolize hope that the coming year will also be sweetつけいんーここでのリニューアルの意味を調べたいから調べるとにのあをんーここでのリニューアルの意味ーはんー英英辞典で調べるとんん」

長めの引用になったが、課程生が全体のテキストを読む終える頃には、全体の中でどの単語や表現が具体的にわからないかが予めわかる状態になっていることが理解できる。英文テキストの全体を読んでいる最中には、辞書等を使って具体的に調べる作業はおこなってはならず、今後その必要性が生じるかどうかについて作業の冒頭で確認をおこなっている。

課程生

「(前略) They believe that toで切れる (後略)」

上記の抜粋は冒頭のテキスト分析の一部である。わからない単語や表現だけではなく、構造の切れ目についても全体の中から把握しているが、全箇所についての発話がおこなわれている訳ではない。

普通生は読むことを意識した瞬間がなかった訳ではない。課程生のようにテキスト全体を把握するために冒頭に全テキストを読みはしなかったが、日本語の翻訳内容を確認するために読むことを意識している。

普通生

「この慣習が示している、信じている。もう1回読んでみよう。彼らはこの慣習が不運が彼らについてくる。文が変だな。彼らはこの慣習が新年を迎えるにあたって。でいいや。彼らいないここ。彼ら、彼ら。変だな。新年を迎えるにあたって不運が彼らについてくるのを妨げることができると信じている」

普通生同様、課程生も日本語訳を読んではいたのだが、「読む」行為そのものに対する言及が翻訳TAPsには検出できなかった。これは、翻訳導入部で全体を理解するために読むことが特別に意識されており、その後の読みは無意識的に翻訳見直し作業の一環になっている、つまり「読む」行為が自動化されているのではないかと考えることができる。普通生についても、多くの場合には読むことが自動化されていることを付け加えておきたい。

文法事項と方略

全体テキスト読みをするかどうか翻訳作業手順の課程生と普通生の間の最大の相違点であったとすれば、ここであげる事項は内容的な翻訳方略に関係する最大の相違点である。課程生が翻訳に関する方略を学んで、実践できている証であり、一方、普通生は、英文解釈の枠組みを逸脱しない範囲の文法知識で英文を解釈しようとする。逆を言えば、課程生の翻訳TAPsには英文法用語とみなすことができる文法用語が、次の例外を除き、ほぼみとめられない。

課程生

「by the time Nouruz arrives seeds have grown young plantsで切れて修飾してるから。that symbolize the new life of spring and the new yearここはsymbolizeしてるのがふたつあるので、まずコンマまで訳すので、このnew yearの

Nouruzが、arriveだけど始まるなのではじまるころにはthe seeds have grown into young plants young、このyoungをどう訳せばいいかな」

「……で切れて修飾している」が文法用語として目だった用例であった。翻訳教育の中で文法を全面的に押し出す事例がいくつかあるが、もっとも著名なものは、安西徹雄『翻訳英文法』（バベル・プレス、2008年）と本田勝一『日本語の作文技術』（朝日文庫、1982年）である。前者は、英語と日本語の文法構造の相違をどのように言語的に変換するかを論じた翻訳技術が紹介されており、後者は、いかに読みやすい日本語を書くかに焦点を当てた作品で、修飾語と被修飾語をできるだけ近づけるなど、翻訳日本語にも参考となるアドバイスが豊富なロングセラー翻訳参考書となっている。課程生が用いた文法用語は、本田勝一氏が説く文法関連の中で翻訳教育でも頻繁にとりあげられることがある修飾・被修飾関係に関するもので、この発話だけでも、翻訳教育が課程生にいかにか浸透しているかが理解できる。

一方、課程生以上に、普通生は文法知識に頼って英文を読み、翻訳をおこなっている。

普通生

「直接訳そう。えと、までに、その種は、え、have grown、え、育つ。have grown。ま、現在完了形だけどそこまで。まあ、現在完了って、意味訳さなくてよくて。まあいいか。普通に、そ、grownて、育つでいいか」

上記の例では、文法事項の現在完了形について、日本語の訳として訳出するかを考察している。その結果、すでに普通生の中にあった知識として、現在完了形は日本語への訳出不要という英文解釈方略によって、have grownが「育つ」との訳に至った。

普通生

「その種が、そのseedsがどうなるかっていうと、何に育つかっていうと、into young plants。若いま、plant訳すと。plants直接訳したほうがいいのかも。育つ、若く生長するほうがいいのか。若いま、消えちゃった。一応plantで調べてみるか。んー、植物苗苗苗って、種。あおっけ、おっけと。そっかそっか、種から育った苗か。そっか、そっか、そっか。じゃあ、えっとーじゃあ。来る前に、種は、が主語で、種あー、でもその種は、のほうがいいか。じゃああー、theがついてたから。あー、theがついてるから、その種にして、そのにして、その種」

この抜粋では、定冠詞theをいかに日本語に訳出するかについての検討がなされてる。普通生の場合には、いわゆる英文解釈の域を出ない逐語訳がおこなわれ、その最大の理由の一つとして、文法知識が唯一の解釈の拠り所になっていることがあげられる。したがって、普通生の発話には、「動名詞、主語、副詞句、動詞、現在完了、自動詞、ing形動名詞、分詞形容詞、従属節、分詞構文」といった文法用語の発話が散見されている。これは神田外語大学の授業である「英語学概論」や「現代英文法」といった授業を履修した影響であることも考えられる一方、課程生は唯一発話した文法用語は「修飾」であった事実との比較において、文法知識に頼る頻度は顕著な違いがみとめられたことも確かである。

表記（情報処理の最小単位）

翻訳をどの程度まで深く扱えるかは、様々な観点から考察することが可能だが、表記の扱いはその中の指標、つまり翻訳の質を判断する際の基準として使える。前述の通り、普通生の場合、文法事項をそのまま日本語に移し変える（定冠詞theは「その」）作業がおこなわれていたが、表記についても、表記の意味や機能など翻訳作業では意味を持ってくる事項につい

て気づきがあるかないかも大きな相違点の一つにあげられる。

普通生

「throughout the worldで世界thro..utがなんとかじゅうで、そのなかで、だから。世界中で、で書いて。で、カンマがあるから読点をうって」

「beforeがあるから。えっとなんだっけ。何週間か前に、だから数週間のほうがいいか。消そと。数週間えっとそうだね。weeksだから数週間でえー。前にカンマあるから句点をいれて」

いずれの抜粋でも、カンマを「読点」、「句点」で置き換える、つまり、カンマを日本語の一表記事項でしかないと考えていることがわかる。この発想は、繰り返しになるが、定冠詞theだったら日本語では「その」と対応させて訳すべきだとする英文解釈（一語一訳）によるものである。

課程生

「the celebration begins on the first day of springで切れてand asked for 13days
このーこれは前から訳すので、このお祝いは、えーっと春の初日最初の日から始まる。始まって春の初日から始まりin last for 13 days 始まり13日間
続くa few weeks before Nouruz people plant wheat or lentil seeds in a small pot、
これは前からコンマまで訳すので、えーこのノウルズがはじまる数週間前に
間前に」

課程生のカンマに対するとらえ方は、普通生の「読点」と同等という機械的な置き換えではなく、翻訳の情報単位を識別する表記とみなしていることがわかる。「前からコンマまで訳す」がその意図を明らかに表している。また表記の問題は記載方法や翻訳方法に留まらず、普通生と課程生の翻訳

処理単位の違いという問題にも関わってくる。

普通生

「during New York new year celebration、えー、ニューヨークのえ、じゃ、ニューヨークじゃない（笑）、えっと新年のnew yearだから、新年のお祝い。duringだから最中になんだっけ」

上記抜粋のように、普通生は単語（または複数語）が最小の翻訳処理単位になっている。during New York new year celebrationを翻訳する際、during/New York/new year celebrationというように3つの情報に区分して、それをそれぞれを日本語に訳した後で、すべての訳をつなぎ合わせる手順を踏む。翻訳をする上で、単語ではなく、情報の最小単位を把握することは極めて重要な作業で、課程生はその方法を体得していることが、表記の扱いを通して理解できる。

課程生

「In Iran the New Year is called Nouruz、この定訳がわからないので調べる。でも出てこないの、出てこないの、名前なので、そのまま英語表記のまま。イランではnew year、新年はNouruzと呼ばれている。イランでは新年は、ここはクオーテーションマークにして」

（中略）

「次は日本なので、in Japan celebration of the new year is called Oshogatsu。えー日本では、新年のお祝いはお正月と呼ばれている。んーと、it beginsさっきも、イランの場合のノウラズもクオーテーションマークを書いたの、一応日本語のときのお正月もクオーテーションマークを書く。と、そのほ

うが共通してわかりやすい」

課程生は、まずNouruzと呼ばれるイランの新年を英語のまま残し、クオーテーションマークを用いて、それが特別な意味を持っていることを訳に表した。次に、日本のお正月が出てきたときには、イラン語のNouruzに対応させる形で同じくクオーテーションマークで挟み込んだ。このように、表記を単なる表記としてだけではなく、翻訳過程で意味を持たせ、許される範囲内で自由に使いこなしている。

調べること

翻訳と言えば辞書というほど、翻訳には調べる事が重要な作業となる。いずれの場合でも、調べることは翻訳作業とは切り離すことができない事実が翻訳TAPsで検証された。

調べることにに関して、課程生と普通生との間にアプローチの違いは見られるようであり、課程生は翻訳作業の導入に当たって、どの単語の意味がわからないから調べるのかをマーキングし、翻訳作業の中で具体的に調べることがおこなわれている。一方、普通生は、翻訳作業をやりながらわからない言葉を調べている。調べることに至るまでに1ステップの違いはあるが、調べる作業については具体的な単語や表現と対峙する際に手を動かすことになる。

次に課程生と普通生との間で、調べることに對する違いとして見受けられたのは、何を使って調べるかであった。

課程生

「ここでのrenewalは何が一番いいかな。英英辞典だとa situation which something begins again after pause or interruptionなのでんー。日本語の辞書に戻ってんー。新しくすることんー。新しくすることだと。なんか変だな。更

新なので、ここは意識で新しい年が始まるにします」

英語の意味は英和辞書には載っていない、というのが翻訳教育では教えられる。英和辞書に掲載されているのは対訳であって、意味ではないからである。それでは意味を知るには何を調べればよいかと言えば、英英辞書がよいとされる。課程生が調べたように、renewalの意味が英語で理解できるからである。また、課程生は英英辞書では満足せず、その後、日本語の辞書を引いている。単一の情報源を鵜呑みにするのではなく、複数の資源を活用して調べものをする姿勢が見られる。

普通生

「その次で、ナイジェリアのなんだ。これ場所だろう。けどでだあー。siwoがどこどこ。イオ。Oops、日本語入力になってる、出てこない。Google先生にお願いしよ。イヨ。なんて読むんだろ。どう入れてみよ。どこ、ナイジェリア、ナイジェリアのイオか。イアか、イアダ。ナイジェリアのイアか」

普通生の場合には、辞書をはじめ、インターネット検索して単語や表現の意味を探す方法も用いられていた。上記の抜粋では、ナイジェリアの都市名の読みをGoogle検索している。その際、「Google先生にお願いしよ」との発話からわかる通り、日頃の学生の中でGoogle検索に精通しており、かつ、Googleで調べれば何でもわかるという、Googleに対する信頼が「先生」という言葉で表されている。

普通生

「to better oneself in the coming year Rosh Hashanah はんー。Rosh Hashanah について少し調べたほうがいい気がする。Rosh Hashanah, Rosh Hashanah,

Rosh Hashanah。ロシュハッシャーナー、ロシュハシヤナ、ふーんラテン語
ユダヤ歴の新年祭。wikipediaへええええ」

普通生の場合には、調べもののツールが辞書に留まらず、上記の抜粋に見られる通り、wikipediaなどインターネット検索を効果的に活用している過程があった。使用ツールなどは、通訳翻訳課程の授業で実施される試験においてどのようなものが使用可となるのか、また、翻訳TAPs作業をしてもらう際に、どのツールを使って作業していいかを事前に告知しておくなど、今後の実験をする上で課題として考えられる。

本研究では、翻訳を学ぶ神田外語大生が翻訳能力をいかに向上させているか、つまり、学生が従事する翻訳行為の過程を理解する方法として、翻訳方略の習得、統合過程をTAPs(Think-aloud Protocols)手法にて調査をおこなった。通訳翻訳に関する広範囲なトレーニングを受けた学生1名、翻訳通訳トレーニングを受けたことのない上級英語話者である学生1名に対して実施したTAPsのデータを基に、翻訳方略に関する比較調査の予備的データを考察した結果、翻訳作業の導入時の違い、テキストを読むこと、調べること、文法事項と方略、表記の5つの事項について特徴的な相違を見出すことができた。

結語

通訳翻訳関係の授業を履修し、さらに通訳翻訳課程の内容に興味を持った場合、通訳翻訳課程生として登録し、修了条件を満たすことができれば修了証書をもらい卒業する。神田外語大学の通訳翻訳課程がこのような運用をはじめて数年が経つが、その間、必要修了条件に見直しを加えられるなど、いくつかの動きが見られた。このような状況にあり、受講生に対して課程という場を提供したものの、果たしてどれほどの効果的な学習効果が得られているかを教育上の観点から振り返ることはあまりなかった。今

回の翻訳TAPs調査を通じて、限られた人数ではあるものの、翻訳の授業を通して、課程生が学ぶ翻訳方略は明らかに普通生とは異なっていることが指摘できたことは確かである。換言すれば、翻訳方略の習得や実践への利用に限って言えば、通訳翻訳課程またはそれを構成する授業群の役割はその目的を果たしていることを暫定的に結論付けることができる。

今回の予備的研究の結果を受けて、今後は、実験結果の信頼性を高めるため、課程生、普通生をはじめ、実際に翻訳に従事したことのある高度英語話者などに参加してもらい、データ量を増やす必要がある。上記の5事項に新たな方略を加え、より複雑で、かつ量的結果として、エキスパート指標の発達段階をエキスパート、非エキスパート、学生の3つのスキルレベルによって分析をおこなう。また、質的結果として、与えられた翻訳課題を完了させるため、異なる翻訳者がとるパス分析を通して調べることで、多面的な方向から実験結果の精緻化をおこなっていく。

付記

本研究は、平成25～26年度神田外語大学言語研究研究所の研究助成の調査研究成果の一部である。

参考文献

- Bernardini, S. (2001). Think-aloud protocols in translation research: achievements, limits, future prospects. *Target*, 13(2), 241-263.
- Eftekhary, A. A., & Aminizadeh, S. (2012). Investigating the use of thinking aloud protocols in translation of literary texts. *Theory and Practice in Language Studies*, 2, 1039-1047.
- Ericsson, K. A. & Simon, H. A. (1993). *Protocol analysis: verbal reports as data (Rev. ed.)*, Cambridge, MA: The MIT Press.
- Göferich, S., & Jääskeläinen, R. (2009). Process research into the development of

translation competence: where are we, and where do we need to go? *Across Languages and Cultures*, 10(2), 169-191.

Lauffer, S. (2002). The translation process: an analysis of observational methodology. Retrieved on 12 September, 2014 from

<https://periodicos.ufsc.br/index.php/traducao/.../5702>

Sugita, M. (2002). Processes of translation by Japanese learners of English; an analysis of think-aloud protocols. 千葉県立衛生短期大学紀要 第21巻第1号、79-86.

安西徹雄 (2008) 『翻訳英文法』 バベル・プレス

石原知英 (2008) 「学習者の内観による文学テキスト翻訳過程の記述 英語教育への示唆として」 通訳翻訳研究、No.8、209-228.

本田勝一 (1982) 『日本語の作文技術』 朝日文庫